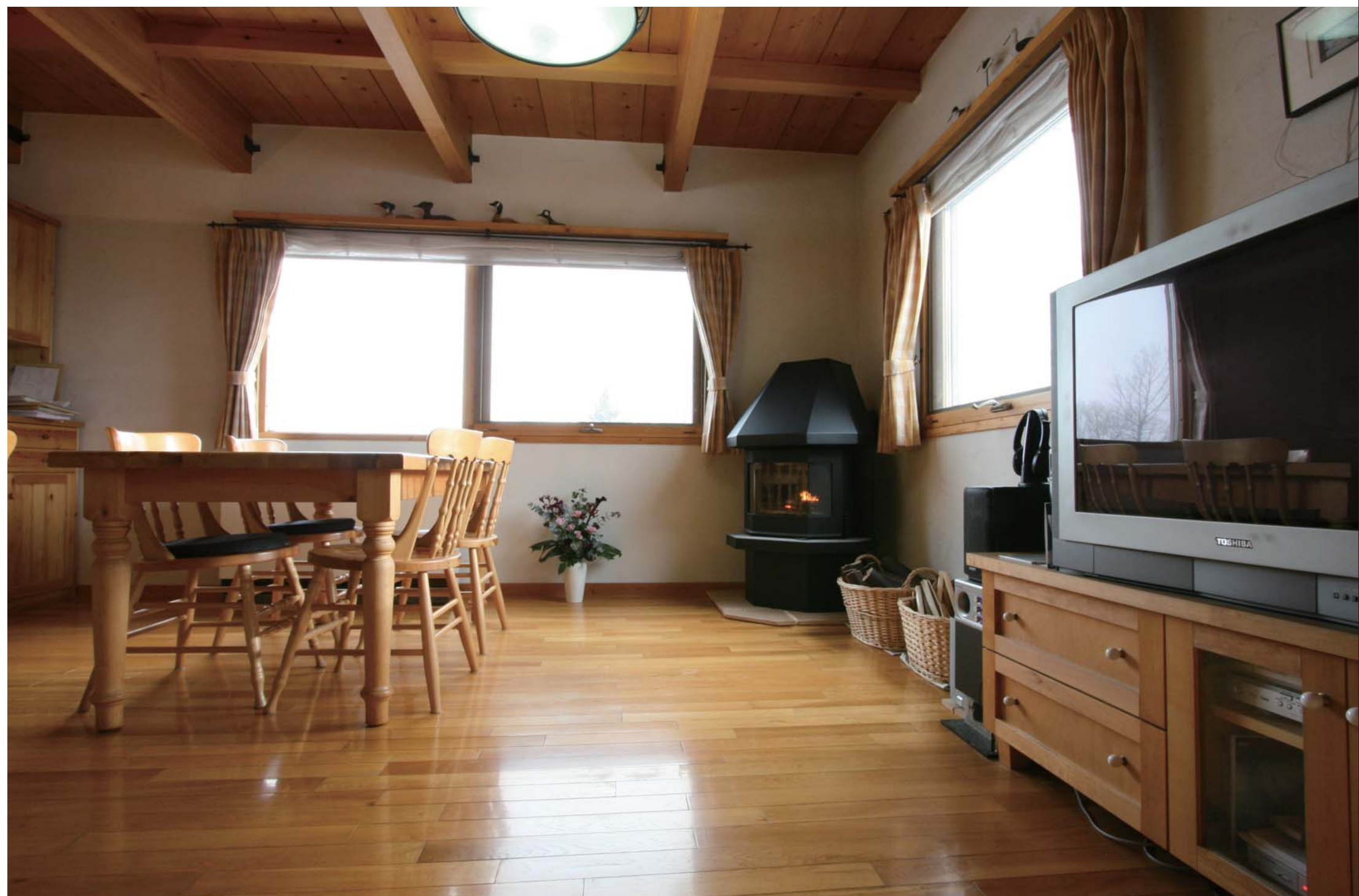


環境にやさしい木と炎のある暮らし



築10年を経過した住まい。実は工建の実験場でもあったが、天然塗料で仕上げた天然木と珪藻土の柔かな素材感が気持ち良い空間をつくりだしている。ここでは大人の火遊びの道具としての「薪ストーブ」が主役だ。

まずはエコロジー建材を考える

自然派住宅に欠かせないエコロジー建材。これさえ見つければ、理想の住まいづくりは完成したのと同じなのだが、次から次へと新手的エコ建材が発売されていて、「何を信じれば良いのかわからない...?」といった悩みも、ちらほらと聞こえてくる。最良の素材選びは同類商品を比較することから始まる。僕たちは「エコ建材の基準」を手掛かりに、エコ建材としての条件を満たしているかを判断している。また、自然素材であることがお約束。

エコロジーの概念では木をたくさん使うことが基本で、自然素材の土と草などを原料にした素材を適材適所に組み合わせた使い方が良いと思う。単純にこれらの条件を満たすものを探して、ふるいにかけると、おのずと選択すべきモノが見えてくるのではないだろうか。安全性の確認は、食品と同じように考えて、製品の成分表を取り寄せる。あまり難しいことは考えず、化学成分の横文字が出た時は要チェック。

僕たちがつくる家は、自然素材で飽きのこないシンプルなづくりが心情。北海道産原料にこだわりながら、無垢の木だけを使っている。道北産珪藻土や道南産漆喰の塗り壁、道内の古紙をリサイクルしたセルロース断熱材などを主材料として使用し、壁紙の和紙は四国から取り寄せる。今では家具や建具もすべて道産無垢の木材でつくることができるし、接着剤を含む合板を使用せずに無垢材だけで家を建てるのが可能だ。

※1 エコ建材の基準

1 持続可能な原料を使用していること	5 有害化学物質を含まないこと
2 生産コストが低いこと	6 土に還る生分解性があること
3 製造エネルギー消費が低いこと	7 廃棄時に汚染物質を出さないこと
4 再使用、再利用が可能なこと	8 匂いや感触、見た目も心地良いこと



エコデザイナー 西條 正幸

1960年伊達市生まれ。札幌を中心にナチュラルスタイルの店舗、住宅の空間デザイナーとして活動。自然素材にこだわった新築、リフォームの設計、施工会社「西條インテリアデザイン」代表取締役。自然派生活提案「えこすた」店主。

我が国が化石燃料で
1年間に放出する炭素
3億2千万トン

樹木中の炭素
11億トン

森林土壌中の炭素
54億トン

我が国の森林に貯留されている炭素量の試算値
(太田誠一,1998)

Ecology House

環境と健康を考えたエコロジー建築



自然素材で新築・リフォーム

エ/コ/ロ/ジ/ー/建/築/エ/房

有限会社 一級建築士事務所

西條インテリアデザイン

本社／札幌市北区百合が原4丁目8-1

tel. 011-774-8599 fax. 011-774-8581

伊達支店／伊達市舟岡町50-28

tel. 0142-22-0138 fax. 0142-22-0139

ホームページ <http://www.saijo-d.com>

炎のある暮らし

温暖化の原因とされるCO₂の排出量は年間85億トンといわれ、そのうち75%は化石燃料の消費、25%は森林の減少が原因といわれている。森林は水と大気中のCO₂を吸収し、光合成で酸素を吸収してCO₂を放出する。吸収したCO₂から放出したCO₂を差し引いた分が、実質の吸収量となる。日本の森林では約11億トンの炭素が蓄積されているらしい。

あまり知られていないことだが、森林の土壌にも膨大な炭素が貯蔵されていて、日本の森林の深さ1mまでの土壌に約54億トンの炭素が貯留されていると試算されている。森林は地球環境を保全する重要な役割を担っているのだ。森林を管理する過程では、植え付け、下草刈・枝打ち・間伐・伐採など手間のかかる作業と時間が必要だ。木をたくさん使い「木の家」に住むことは、結果的に森林を守り、さらに持続可能な再生資源として地球環境を保全することにつながる。

灯油価格の急騰からか、薪ストーブの人氣が急上昇しているらしい。寒い北海道の冬の夜、ゆらゆらと揺れる炎を眺めながら過ごすのも良いものだ。燃料にする薪は木質ペレットと同じバイオマス燃料



A・国産ペレットストーブがまだ製造されていない時期に輸入されていたカナダ製のペレットストーブ。／B・炎を楽しむ囲炉裏とメイン暖房として国産ペレットストーブを設置した住まい。／C・ホワイトペレット燃料。



木の家を考える

エコロジー建材としての「木」はカーボンニュートラルの概念からも、環境にやさしい最高の素材である。エコマテリアの代表である「木」だが、接着剤で固められた合板も木でできている。自然素材であっても、人工的な手が加えられ、本来持つている質感や香りを失った素材には、人の五感を癒す自然の優しさは感じられない。

本来住まいとは、私たちを守り、癒してくれる第3の皮膚でなければなりません。私たちの先祖が、自然と共生しながらつくり上げた住まいは、木の家でした。豊かな山の恵みを生かし、地域で得られる資源を利用した素朴な自然素材は、家全体が呼吸する、地球にも人にもやさしく、健康な住まいをつくる上で欠かすこ

とできないものだ。循環型社会における木の役割は、地上資源で更新、再生される循環型資源の代表として取り上げられる。この循環サイクルを守るためにも、少なくとも木の年齢分だけは使用したいものだ。大量生産、大量消費、大量廃棄から生まれる新建材が私たちの健康と大切な地球環境に負担をかけている

昨今、「木の家」の本来あるべき姿を考え直しても良いのではないだろうか。また、日本は世界一の木材輸入国で、木材自給率は2割程度しかない。しかし、最近の輸入材の高騰や資源不足などで国産材を見直す動きが活発になってきた。ウッドマイルズ^{※2}の概念からも、国内の森林資源の活用を見直す時期にきている。

※2 カーボンニュートラル…何かを製造する一連の人為的活動を行った際に、排出される二酸化炭素と吸収される二酸化炭素が同じ量である、という概念です

※3 ウッドマイルズ…木材を環境の側面から評価するとき、輸送のプロセスも大きな影響を与えます。木を輸送する際に発生する環境負荷を評価しよう、という概念です